



元本田庄司
第39回野宿塾は、8月20日北海道は苫小牧港を起点に行われた。参加組員4名、7月12日佐多岬から日本縦断を果たし、よくもまあ生きていたデコンブワイヤーブッヂレX Rストリ。仙台港に、鈍く光る「夜会」の2文字。東京から6号線北上中、2度の雷雨に遭いながらもフェリーで上陸バハ地下鉄。バイクに乗るのは1年振りで、塾参加もオーストラリア以来と、ほとんど一般人と化している

**北海道野宿望行けど遠めど林道
はづこ。野宿地図をしひ行き止まり。
本居宣長のスタセニア編**

寺崎組新開

發行所：青島組新聞社

その日、北見まで走った組長は高校時代の友人宅でさんざん酔っぱらつた。自衛隊の返事「いた、いた、乗つてた」バカヤローであった。記 組長

恒例の抽選会では組員数名も当選し、Tシャツ、ステッカーを頂いた。配給の夕飯は豚汁、朝食はおにぎり＆牛乳。他にもアルコール類、ソフトドリンク等々、夏季ということもあってか前回より糧食面ではかなり縮小されていた。伊藤兄弟がいつもの焼肉と、翌朝は伊勢うどん。須藤さんが体調悪化で出力ダウン。浜島監督のBAJAのナンバーープレートが脱落紛失。青木さん、借物R1-2にオフ姿で乗車。以上

去る8月27・28日に、長野県は例の入笠山キャンプ場にて、道祖神9海外ツーリングの宴が催され、寺崎組長以下組員約10名も参じた。93年の宴に続き、約二百台のバイクと四輪車が集結し、概ね好天に恵まれ、今回も盛況な宴だった。いつもの組会とは違つて組外の善良な一般民間人方達が多くいらしゃつており寺崎組の焚火周辺にも前回同様に全国の寺崎本読者（女性も含む）が三々五々集い、そしてあきれ立ち去つて行く……いつもの光景であつた。

A black and white photograph showing a group of approximately ten people standing outdoors. They are positioned in front of a white, semi-circular tent or canopy. The individuals are dressed in casual clothing, including t-shirts, shorts, and jackets. Some are looking towards the camera, while others are looking away or to the side. The background features dense trees and foliage, suggesting a campsite or outdoor event.

第二回道祖神 「宴」入笠山



A black and white photograph of a car's dashboard. The dashboard features two large circular gauges: a speedometer on the left and a tachometer on the right. Between them is a rectangular fuel gauge. The speedometer has markings from 0 to 100 in increments of 10. The tachometer has markings from 0 to 6000 in increments of 1000. The fuel gauge shows the tank is nearly full. Below the gauges, there are several small rectangular indicators. The overall image is grainy and has a vintage feel.

G X 4 0 0 10万km走行達成
去る8月20日、静岡県浜松市のR3
62に於いて、酔っ払い金子の愛車G
X400のオドメーターが遂に10万km
を刻んだ。学生時代、スクランブル寸前
の姿で先輩からタダで引き取って来て
以来、北は足寄、南は佐多岬まで轍を
刻み続け、11年目にして悲願達成だ！
思えば豪雨の秩父の山中で点火系が
リーケし、2時間以上キックし続けた
り、宮崎でいきなりシートレールが折
れたりと色々な事が有りました。
水筒につめておいたおいたアーリー
タイムスをタンクとエンジンにかけて
乾杯し幸せな気分になつた夏の一日で
ありました。

日本統一達成祝!!

日本総裁達成祝い　西村　水の国、日本を旅して

今年の日本は暑かった。それも半端な暑さじゃなくて、旅の12日目に深渕落合林道を下って瀬戸内側へ降りた夕暮れなんか、潮の香りと一緒にモア一、汗がベターな状態になつて、それから一度も四国山地から内海へは降りなかつた位に大変だつた。だから野宿地は川原にしようと、夕暮れ間近になるとキヨロキヨロと川筋を覗いて走つていた。でも油断大敵なわけで、安芸の張川林道の渕の内側でテントを張り終えてパンツで川へ走つた日など、どこから来たのか若い男女が歩いていたりしてテントに逃げ返らなくてはいけないのだ。

空しく正座などして、ファスナーを開けて二人の姿を追つたり、ビールが温くなる心配をして一本飲んだりと、これが仲々大変だつたりするのだ。

川への入り方だって、ちゃんと作法や手順があつたりするわけだ。足を洗うふりをして、やがて周囲に視線がない事を確かめてやつと水につかり、そして無礼溝ななわけだ。後は野となれ山となれ状態になつたら洗濯だつてしまふなくてはならないし、泳がなくてはならないしと、旅も苦労が多いものだ。

私が旅に持つた石鹼は純度100%の、バクテリアが2時間で分解してしまうらしき品物で、品行方正さと反比例して泡立ちが悪い性格も兼備えていたりするわけで、環境問題にまで私の旅は気を使つていなくてはならなくて、正しい野宿はやっぱり大変なのだ。

雨が降るべき所に降るならば、それはそれでいいのだが、和歌山の龍神などは一年中降つてゐる所なわけで、おまけに旅の17日目にとうとう台風7号に追い着かれてしまつた。

雨停滯は退屈で悲惨だ。

南紀雨どころの本領發揮とばかりに、台風が下関あたりに移動したのに、どこまでが台風の雨なのか区別も付かない位に降るもので、小森谷林道の入口で2日も閉じ込められてしまった。

タオルに沁み込ませて外に絞つたりで何百杯も引つくり返せば池に浮べた酔うに洩つて来るというものだ。もう旅も人生も達觀してしまう位に悟りの境地に入れてしまうのだ。

けれど私は戦う人なのだ。

森林破壊、人工の集中、温暖化現象と人為的な原因以外に日本の山の特性が水害をもたらす場合もあるという。旅の21日目、御岳の一連の大林道群を抜け月夜沢林道を走行中に実際にその恐怖に遭遇してしまった。

小野原から入ってカラマツ林のストレートを軽快に抜けて、右へガレた上りが分岐する頃に雨になつた。やがて本降りになつて、月夜沢峠に達する頃には2本の轍が川になつていた。

奈川への下り8キロ部分は崩壊の多い、いわゆる難所なわけで、谷が深く切れ込んで普段でも慎重に進まねばな



と一応は孤軍奮闘するわけだが、ドカーシーを丸めて何もかも包み込んでシユラフにくるまつて眠る結論に達してしまふと、悟りも諦めに變るのだった。さて、私一人が水の恩恵に喜んでばかりはいられない。

旅の途中九州、四国、瀬戸内の水不足は深刻を極め、各地のダムでそれを実際に見て來た。ダムは放流を止めてしまい、下流の沢が枯渇して白い岩肌が沿々と続く様は恐怖だつた。大木屋小石川林道へ向かう途中、V字の深い谷が合流するダム底には、恐怖を通り越して悲しみすら感じた。

四国の早明浦ダム、大森川ダム、御岳の三浦ダム、熱塩加納の中ダム、河北林道の石見ダム、どれもが深刻な状況下にあって、旅が終わつて一ヶ月が達とうとする今日も改善されたとい

深くて悟りの境地はまだ遠くて、テントの水没一度や二度では仲々計り知れないものなのだ。パチパチ！

○ 雨雨降れ降れのストウ
ざ・T W組 by 柳沢T W

去る7月某日、能登半島にて行なわれたT W集会には、6名のT Wオーナーズが集結し、能登有料道路、千里浜渚ドライブウェイを6台のT W200が爆走した。詳しくは、「モーターサイクリスト」10月号279ページをご覧下さい。オーナーズクラブの正式名称は、「ざ・T W組」に決定した。T W組新聞の発刊の予定は未だ無い。

走りまわる人達の中の齊藤さんといふ人が、林道の雨の状況を聞いてきた。そして、月夜沢から野麦への山並は表土のない急峻な山で、降った分の雨が沢へ出るのだという。

奈川へ下る途中、平行して流れるもう一本の沢が濁っていないのを見て、その話が実感できたのだ。

この他に南紀の猪籠林道支線と、紋別の上古丹14号沢線林道でも、雨の夕暮れに大迷走をして、反省したのだった。けれど清冽な沢水で冷やしたトマトやキュウリ、四十万十源流水で煮たラーメン、吉野川系源頭の水の味は忘れる事はないだろう。

白髪翁留孫林道川原の蜩の大合唱、テントに迷い込んだ沢ガニ、水に関する記憶のひとつひとつは、今日も明日も、そしていつまでもかわらない。佐多岬から宗谷岬へ。174本の林道と1775キロのダート。9662キロの道程。日本も仲々良い国だ。

東海の陽いざる国の野宿旅も、奥が

らない所なのだ。8年間に10回通過の油断と、先を急ぐ心が峠で止まる事をさせないまま一気に下らせた。

そして土砂降りになつた。

土色の濁流が轍を覆い路面全体が川になつてしまつた。山側の斜面から滝が落ちる様に水が流れ、谷へ一気に下つて行く。路肩が削られた所もあつた前輪で路面を探りつつ、右へ左へラインを変えて、もう峠へのUターンも出来ない状況の中、下るしか頭になかった。僅かにある平坦な部分は、深さ20センチ位の池の様になつていて、歩いて渡つて確かめてから前進した。

野麦峠への県道の分岐に出て、やつと恐怖心から開放されたのだが、しばらく川の流れを見たまま動けなかつた地元の川瀬建設の人達が、川原の重機を回避させるのに走りまわつていた。

何台もの重機が県道に上げられた。

台↓苦小牧、350mlが300円（き
あま）500mlが450円（高い）
だつた。したがつて500は一個も買
わなかつた。後は小樽↓新潟のフェリ
ーは350mlが280円、500mlが
380円と良心的で、割とおすすめフ
エリーである。

フェリーなんかあれだけ容量があ
るのだから定価とは言わないが、一割増
位の値段でもバチは当らないと思う。
しかし、それだときっと到着まで飲
でいそうな奴（組長も怪しい）が出そ
うなのでフェリー会社の配慮かもし
ない。

り変え）良くわからないが、今思えばとても良心的だつた。次ぎに乗つたのが高知→東京の「さんふらわー」、フェリーターーミナルで350㎖が250円だったので、船内もその値段だと申つた。最初に乗つたフェリーも350㎖が250円だったのを、そう思った。でもね、とても高かつたのよ。余裕でフェリーに乗り込み、客も少なかつたので（10月下旬）フロにも入つた。サッパリして「さあビールだ」と販賣機を見れば、何と350㎖が350円500㎖が450円もするではないか！。出航前だったので、慌ててフェリーターミナルへ行きビールを買つたことが今でも鮮やかに思い出されます。その次ぎは東京→釧路のフェリー。さすがに船内2泊なので、買わざるを得ないのだが350㎖が300円、500㎖が400円とまああつた。川崎→日向のフェリーも乗つたが値段は忘れてしまつた。ほとんど買わなかつたのだろう。最近乗つたフェリーは仙

フェリーのビールを考える

僕は過去10数回長距離フェリーに乗ったが一度も食堂とか、レストランに入ったことが無い。フェリーの食堂はとても高いし、日常の生活でも食い物屋へは滅多に行かないのに自然にこうなってしまった。給湯室もフェリーには必ず付いているので、カップメン等で何とかなる物である。問題はビール。大量に買い込んでも良いが、やっぱりつめたいビールがしい。寒い時期は甲板に置いておけば冷えそうだがそれもできない。てなわけでフェリーのビールを考える。

始めて乗った長距離フェリーは苦小牧→東京で平成元年当時350mlが50円、500mlが350円だった。(と思う)今や「さんふらわー」になってしまったので(船はそのまま、塗装)

だが、我編集部はひそかに恐れてい
事がある。ザック姿の怪しいバイク
りが、林道の支線や川原に溢れてし
つたらどうしよう。酒屋兼雑貨屋に
んな人達が押しかけたならば、日本
秩序だつて乱されそうな気配だし少
恐れているのです。大バスを求めて
釣具屋さんを巡る人も増えそうだ。
さて結論はとすると、自分の旅の
検とこれからの方に組員は読まなく
はいけない。感動もしてはいけない
講えてもいけない。組長にとつては
ほんの日常の事なのだから！

尚、誌面上に浜島氏に関する重
な過失がある事を、特に奥様にお詫
申し上げますとの組長の弁でした。

むと思うのだ。
さて『自由じかん』を読んで、文
の簡略さ表現のストレートさを感じ
人に伝わる文章を書くのが大変な事
益々思うのだ。
英語力が大分ある人なので、逆に
分から人を求めていた様に思うのは
それぞれの旅のスタイルと思つたり
する。
やさしい家族に恵まれて励まされ
どしどし旅に出てほしいと私達は思
のです。
今度、日本の林道で一緒に旅をして
しよう。

寺崎組編集部

● 前原弘昌著『自由じかん2万キロを読む』

ここ数年、特にオーストラリアをするライダーが多くなった様に思う。達のまわりにも数人いたりするわけ。各人各様の旅のスタイルにその人の性格さえ見る思いがする。

ひたすらアウトバックに入り、のうちまわって野宿する人。人を求める出会いが全ての様に走る人。日本の北海道の凝縮をオーストラリアで見る事ができるようだ。技術と装備追いつかず事故、怪我に遭う人。油から来る人為的事件に遭遇する人は日本でも外国でも共通した心構え必要なように思える。

前原さんのXT600の選択を我浪の税金がすばらしいと言つていバーツの供給からメンテ、耐久さまた旅の道具には求められると思うのだ寺崎組の旅人は人を避ける事と、孤分を守る事を何よりの課題とする。孤分を守る装備と、一人で耐えられる

「原稿大募集の

お知らせ
この新聞は年六回の発行を予定しております。年間購読料は二千円以上です。購読希望の方は何らかの方法（現金書留・郵便振替・普通封筒に入れて等）で送っていただければ幸いです。この新聞を永続させるためにも原稿とともに新聞制作のお手伝いにも来ていただければなお幸いです。

平成六年度寺崎組宴会地	酒
宴 II 10月8日正午より	
熊本県菊池郡旭志村鞍岳野営場	
11月26日12時集合	
和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	
宇久井、フエリーターミナル前	
12月23日正午より	
山梨県韮崎市小武川上流	
甘利山青木鉱泉分岐近く	
平成7年2月11日正午より	
東京都奥多摩町六ツ石山頂上	
「寺崎組新聞」の	

金■あなたのバイクも10年も日本車で
沢■ノリ張りの才能を発揮してしまつた
ワイルス■アメリカへ2-3年行くこともあります

柳一 ではやがて良バイクあれども丁度
税一 リーはつらー、たゞ玉乃作れうん土
也一 ワガロコつま料理作るはどうか

組長単行本新発売 「バイクキャンピング」

○サイクルフィールド (季刊) 山海堂
○○C C V (季刊) 大日本絵画
(季刊) 秋号発売中
秋号 10月末発売

組長執筆中 雜誌
○ダートスポーツ
○バッタオフ 不定期 今回はモングル 第2
○オートキャンパー 毎月24日発売
毎月6日発売 八重洲出版局